関係各位

——市大準貴重資料『戦線文庫』のデジタルアーカイブ化のお願い——

つい先日刊行されたばかりの押田信子『抹殺された日本軍恤兵部の正体　この組織は何をし、なぜ忘れ去られたのか？』（扶桑社、2019年7月）を高橋寛人教授がFacebookで紹介され、私自身まったく知らなかった組織とその活動・宣伝の歴史であり、大変興味深く重要な問題を解明した本だと、図書館に収書をお願いしました。

そして、押田著6ページを見て、実はこの本の土台となった一次史料『戦線文庫』が、国会図書館も所蔵していない特別貴重本であること、全国（全世界）で市大図書館にしかない重要資料であることを知りました。われわれ歴史研究者にとっては、一次史料こそ命です。まさに、『戦線文庫』も、第二次大戦中の日本における戦争への国民動員のメディアとして、何をどのように表現したのかを知るうえで、第一級の一次史料であります。

この貴重な証拠資料を全国全世界の研究者はじめ多くの人々が是非とも見てみたいと思うのは必然です。ところが、貴重資料保管庫の閲覧室で司書の方立ち合いで現物をみせていただきますと、戦後70年以上たっていること、その間の保存状態が悪かったこと、合本・製本状態が悪く、また戦時中のことで当然とはいえ紙質もあまりよくないこと、このままでは研究者も手にとって内容を検討するには極めて困難が伴うこと、慎重に扱っても破損の危険があることなどが確認できました。

従いまして、こうした貴重資料に対する全世界的な対処の仕方、すなわち、デジタル化をおこなうことが必要不可欠であると考えます。

デジタルアーカイブとして、全国全世界から関心のある人々が、現物を見ることができるようになることは、歴史認識に多大の貢献をなすことであります。また、市大だけしかもっていない貴重資料を全国全世界で利用できるようにすることは、所蔵者の国内外に対する社会的責務でもありましょう。私ども市大に何らかの形態で所属する研究者は、当然にも、全世界のオープンな一次史料から多大の恩恵を受けて、研究を行っています。貴重資料公開のこの世界的な相互依存性・相互連携性からしても、市大所蔵の貴重資料をデジタル化によってオープンにすることは、大学の学術の使命に対する姿勢を鮮明にすることであり、重要な社会貢献であると信じます。

関係各位のご理解を賜りますよう、早急な実現かたをお願いいたします。

2019年7月30日

永岑三千輝
横浜市立大学名誉教授・同大学院都市社会文化研究科客員教授